第1分科会

「スポーツ宣言日本 ～21世紀における スポーツの使命～」への取り組み

コーディネーター **佐伯 年詩雄**
日本ウェルネススポーツ大学 教授

「スポーツ宣言日本」と次の一歩

パネリスト
菊 幸一
筑波大学人間総合科学研究科 教授

「スポーツ宣言日本」成立のあらまし

「スポーツ宣言日本 ～21世紀におけるスポーツの使命～」は、日本体育協会の前身である大日本体育協会の創立から100年経たことを記念し、昨年7月に発表されました。本宣言は、大日本体育協会の初代会長、嘉納治五郎氏が趣意書に表した志を受け継ぎ、現代化したものといえます。

本宣言の採択の手順を簡単に説明します。「日本のスポーツ100年～これまでとこれから～」という共通テーマに基づき、全国3会場でシンポジウムを開催しました。福島会場は「スポーツによる公正で福祉豊かな地域生活の創造」をテーマとして2010年10月23日に開催されました。同年12月11日に開催された京都会場でのテーマは「スポーツで考える環境と共生の時代」、翌2011年2月26日開催の広島会場は「スポーツが築く平和と友好に満ちた世界」がテーマでした。これらをまとめる形で、2011年7月15日に総括シンポジウムを東京で開催し、本宣言を採択し、シンポジウムの翌日、創立100周年記念祝賀式典の席上で披露手交されました。

本宣言の冒頭には、スポーツの概念が明確に規定されています。それは、「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である」ということです。特に「自発的」という点が重要で、誰にも強制されるものではないという点がポイントです。自らスポーツに取り組み、その楽しさや喜びの享受が無ければ、それは何の結果も生み出さないという基本的な捉え方がなされています。各会場のシンポジウムのテーマを振り返ると、すべてスポーツが主体、主語になって、その価値や意義を創造していくという立場をとっています。

「スポーツ宣言日本」3つのキーワード

本宣言の中ほどには、グローバルな課題解決に向けてスポーツが貢献できることが、順番に三つ挙げられています。

まず一番目の主旨についてご説明します。スポーツは、運動の感動や喜びの共有を通じて人と人との絆を培うという文化的特性を持っています。このことは、我々が普段から経験的に理解していることですが、仲間内の関係性の中で止めるのではなく、もっとスポーツにかかわっていない人にも広げていく努力をしていかなければいけないのです。先の東日本大震災の時、被災者たちはスポーツどころではないはずなのに、スポーツに何かを求めようとする姿が見受けられました。スポーツを通じた絆に惹かれていく部分がそこにはあったのではないかと思われます。そしてそれはスポーツが、地域生活の豊かさへの貢献の可能性を持つということです。

21世紀はますます多様化が進み、地域に様々な人たちがやってきます。その中で、差別無く、どんな人であっても楽しめるスポーツは、公正で福祉豊かな地域社会の創造に寄与できる可能性があるのです。

次に二番目の主旨です。我々は自由に身体的諸能力を発揮するわけですが、その素朴なからだの喜びに根差した活動は、共感の能力を我々に育ませてくれます。21世紀は情報によって生活が成り立っていると言っても過言ではありません。そういう中でからだというものがどんどん置き去りにされています。しかし、スポーツは身体的な諸能力を発揮し、それを洗練化させ、研ぎ澄ましていくことができます。これによって他者の痛みや自然環境の破壊への思いといった感覚をからだを通して受け止めることが可能となります。つまりスポーツは、環境と共生の時代を生きるライフスタイルの創造に寄与する可能性があるのです。

最後に三番目の主旨です。私たちが何故スポーツをプレイできるかといえば、対峙する相手が自分を尊重してくれるという思いが相互にあるからです。この相互尊敬を基調とする文化的特性を持つスポーツは、真の親善と友好の基盤を培う可能性を持つのです。21世紀は、ますます国民、国家を越えて複雑な様相を呈しています。平和でなければスポーツができないという思いではなく、私たちはフェアプレイの精神を積極的に推し広げていくことで、結果的に平和と友好に満ちた世界の構築に寄与できるのではないかということです。

以上の三つのミッションについて、私たちは自覚を持って次の世代、あるいは22世紀にバトンタッチしていかなければなりません。それは子どもたちを指導していく場合においても、常に念頭に置く必要があります。本宣言におけるスポーツの使命の達成とは、すべての人々がスポーツの21世紀的な価値を享受することであり、私たちがその価値を伝えていく伝道者となることが求められているということです。

「おわりに」の部分では、使命の達成にあたって日本体育協会、日本オリンピック委員会は総力を挙げて取り組むと記載されています。政治や経済の言葉でなく、スポーツの当事者からスポーツの言葉として発信していくこと、そのことによってスポーツ・イニシアティブを発揮することが大事です。私たち民の立場から発する宣言の意義はここにあるのです。昨年制定された「スポーツ基本法」と手と手を携えながら、しかし基本法ではカバーできない、あるいはその限界を越えていくものとして、本宣言は捉えることができるのです。

スポーツの次なる一歩

では次なる一歩はどうなるのかと考えた時に、私たちはこれまで一生懸命に子どもたちを指導したり、地域でクラブ経営に携わったりしてきました。これはこれからも変わらないと思います。ただ、これまでの志はスポーツという世界に閉ざされたものでした。

スポーツを非常にピュアで穢れなき世界と捉え、「スポーツは政治的に中立であるべき」あるいは「スポーツが経済とかかわるなんてとんでもない」と言われることがあります。そういう中で、組織も集団も知らない内に閉ざされていたところが、スポーツの世界にはあったのではないでしょうか。成熟した市民社会において、スポーツが嫌いな人にもスポーツの価値を発信するには、開かれたスポーツでなければなりません。本宣言でみたような、私たちの生活を支え、発展させてくれるスポーツのパワーを、スポーツ嫌いの人も含めて広げていくことができるかが、今後問われてきます。私たちは、そういう意味での自覚を持たなければなりません。各人が一つひとつの指導、一つひとつの出来事を見つめ直し、自分たちが次の世代に向けてどのような力をバトンタッチできるかを考える事が第一歩であり、その積み重ねが大きな力となって、私たちが理想とするグローバル社会の形成につながっていくと考えています。

スポーツにおける「自発的」の意味

パネリスト
滝口 隆司
（株）毎日新聞社編集局運動部副部長

「自発的」という文言の重み

一般の方にはあまり知られておりませんが、特にこの10年ぐらいの間に、スポーツ政策の分野でさまざまな方針や計画が打ち出されるようになってきました。

最初はシドニーオリンピックの年、2000年でした。五輪開幕の少し前に当時の文部省から「スポーツ振興基本計画」が発表されました。そこで打ち出されたのが、総合型地域スポーツクラブを各市町村に設立する、オリンピック競技においてはメダル獲得率をアトランタオリンピックの1.7%から3.5%に倍増させるという計画でした。これに基づいて日本オリンピック委員会がゴールドプランを作り、その実現に向け動き出しました。そうこうしている内に国立スポーツ科学センターができ、次にナショナルトレーニングセンターが完成しました。

2008年の北京オリンピックの頃になると、今度は政党も動きはじめました。まず自民党に「スポーツ立国調査会」ができました。政権が民主党に変わると、今度は民主党政権下で2010年に「スポー

ツ立国戦略」が打ち出され、そして今、「スポーツ基本法」という新しい法律ができました。さらに「スポーツ基本法」に基づいて現在、「スポーツ基本計画」が練られているところです。

そんな状況の中で昨年、日本体育協会と日本オリンピック委員会の創立100周年を機に「スポーツ宣言日本」が発表されました。この「スポーツ宣言日本」は、日本体育協会と日本オリンピック委員会という民間組織が宣言した点において、他の計画や戦略とは一線を画しています。

特に一文目の「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である」という文言が、民間の決意を示している見ることができます。昨年8月に施行された「スポーツ基本法」の前文にも「スポーツは世界共通の人類の文化である」と、同じようなことが書かれているのですが、「スポーツ宣言日本」に「自発的」という文言が入っているところが非常に大切だと、私は思っています。我々メディアの立場としても、「みる」側の視点ばかりでなく自発的に「する」側の視点、スポーツを何故するのかということをもう一度考える必要があるのではないかと考えています。

自発性を引き出す工夫を

昨年、私は東京マラソンの抽選に当たり、初めてフルマラソンを走りました。5時間27分かかってゴールしたのですが、3万人を越える人たちが一斉に東京の街の中を走り、ボランティアの人や沿道でランナーに飴を渡したり味噌汁を用意する風景をたくさん見かけました。メガイベントとなったことに批判的な方もいますが、実際に走った者として、これは行政が作ったイベントというより、走る人も観ている人も自発的な楽しみを享受している大会だと実感しました。

なぜ「自発的」という言葉が大切なのか。それはやはり、スポーツの自発的な部分を蔑ろにされてきた歴史があるからです。過去には戦争のためにスポーツが利用されました。当時、スポーツを管轄するのは厚生省であり、まさに富国強兵のために若者の体力が鍛えられました。あるいは、金儲けのために利用されることもあったでしょうし、我々メディアが販売部数拡張、視聴率アップのために利用することもありました。これをいま一度反省する必要を非常に強く感じています。

日体大の名誉教授、森川貞夫先生が出された本の中には、「競技団体の収入は四本柱であるべき」と書いてあります。一つ目は大会参加料、二つ目はその試合を観る人の入場料、三つ目は連盟に登録するための登録料、そして四つ目がスポーツを指導することによって得られる指導料です。要するに、一気に大金が入るスポンサーマネーとかテレビ放映権とか補助金等を当てにしてはいけないと書かれていました。やはり、自発的な活動をスポーツ界が維持していくためには自立の精神を持ち続けなければいけないと、ずっと感じています。そう簡単にいかないことは分かりますし、補助金の制度を使うこと自体は悪くないのですが、それに依存してはいけないと思います。

先日、全日本アマチュア野球連盟の記録委員として、会議に出席したところ、審判員のライセンス制度導入が議題に上りました。「ボランティアでやっているのだからそのままでいいじゃないか」という声と、「制度を設けることでこれまでまったく興味の無かった一般の人がその試験を受けに来るのではないか」という声があり、興味深い議論でした。

審判にしても指導者にしても数が減っているのは事実であり、新しい人材を自発的にすくい出す方策を考えていっても良いのではないか、と思います。国や行政はそのような自発的に動く人たちの後方支援にあたることが大切ではないでしょうか。

スポーツの次なる一歩

慶応高校野球部の上田誠監督を取材した際、「どういう選手を育てたいか？」と聞くと、「大人になった時に『野球って面白いぞ』と自分の子どもに伝えたり、恋人を連れて『ナイター、観に行こうか？』というように、スポーツの喜びや楽しみを次の世代にも継承していく人間を作ることが、僕の指導者としての役割です」と答えました。逆に「学生時代で燃え尽きました。もうスポーツなんかしたくない、という人間を作っちゃいかんのだ」と強調されました。

メディアの立場というのも、根本は同じではないか、という気がしています。スポーツの面白さ、楽しさ、喜びを何らかの形で継承し続けなければいけないし、おかしなことに対しては「これはおかしい」と、これもまた継承していかなければいけない。その時の基になるのが「スポーツ宣言日本」に書いてあるような思想的な部分だと思います。少し前に、スポーツの思想とか哲学を語れる人間がメディアに少なくなったね、と言われたことがあります。我々メディアの側からも思想的な部分を再構築しなくてはいけないと思っています。

スポーツから発信していく「積極的平和」

パネリスト
清水 諭
筑波大学人間総合科学研究科 教授

「フェアプレイ」と嘉納師範の教え

私からは、特に「平和と友好」というキーワードについて、オリンピックをはじめとするスポーツイベントにからめて問題提起したいと思います。21世紀におけるスポーツの使命が三つある中で、特にフェアプレイは非常に重要です。あるルールに則って正々堂々と戦うということは、自分だけではできません。相互に尊敬し合うことでゲームが成り立ちます。これは企業間での激しい競争の中では考えづらいことでしょう。相手が何を考えているのか分からない日常とは異なり、スポーツは相手に自分を委ねたり、人種、民族、ジェンダーの壁を越えて様々なことを体感させてくれたりする。その意味で、フェアプレイの精神はスポーツというが文化が持っている本源的な価値といえます。

嘉納治五郎先生は1909年にアジア初のIOC委員に選出され、1911年に大日本体育協会を設立されました。柔道・講道館の創始者でもあり、東京高等師範の校長を三期、約24年にわたって勤めた嘉納先生は、中国からの留学生を、講道館も含めて約8,000人も受け入れた方でもあります。嘉納先生が言われた、効率良く力を発揮しつつ、しかしそれは自分だけでなく他者、人類全体を繁栄させていくという「精力善用」「自他共栄」の精神は、価値ある大きな力を持つ言葉としての発明といえるでしょう。その言葉を生み出した文化としての力を私たちは100年前から持っている事実を尊重したいと思うのです。

スポーツを通じた「積極的な平和主義」の発信

嘉納先生も深くかかわったオリンピックは、100年にわたって世界の都市を巡る中で、いろいろな問題を起こしてきました。1931年のベルリンオリンピックでは、ヒトラー政権下で民族的な弾圧、様々な差別的な行為がなされました。

1968年のメキシコオリンピックにおいては、200mで1位と3位に輝いた2選手が人種差別撤廃の抗議行動を表彰台で行いました。アメリカ国旗には目を向けず、シューズを履かずに黒いソックスを履き、そして黒いグローブのこぶしを突き上げる政治的なデモンストレーションを行ったのです。

1980年は、当時のソビエト連邦によるアフガニスタン侵攻に抗議し、西側諸国がボイコットを行いました。日本も出場を断念せざるを得ず、柔道の山下泰裕さんやマラソンの瀬古利彦さんといった選手たちが涙を飲みました。

その一方で、オリンピックをはじめとするスポーツイベントにおいて国や性別、あるいは民族や人種の境界線を越える運動も様々に行われてきました。例えば1991年、幕張の世界卓球選手権では、分断状況の南北朝鮮が統一コリア選手団を結成し、優勝しました。1997年には、小谷実可子さんがオリンピック休戦に関する演説を行っています。これは古代オリンピックにおいて戦闘を停止する“Ekecheiria（エクスケイリア）”という取り決めにつながるものであり、2000年に国際オリンピック休戦センターが立ち上げられています。スポーツを通じて「平和と友好」を実現する意味合いがここにあるわけです。

1964年の東京オリンピックでもさまざまな取り組みが行われました。そのひとつが聖火リレーです。ギリシャ、オリンピアに始まって51日、12カ国、7,484km、計10万人が携わった聖火の最終ランナーは、原爆投下の爆心地から約70km離れた広島県三次市出身、坂井義則さんがつとめました。また、東京オリンピック当時、日の丸の掲揚が認められていなかった占領下の沖縄において、聖火ランナーが通る際、沿道が日の丸で埋め尽くされました。10月10日の開会式に始まった期間中、スポーツ評論家の川本信正さ

んは「競技場のスタンドに座っていると、そこが東京でもなく日本でもなく地球を遠く離れた宇宙のどこかにぽっかり浮かんでいるような錯覚にとらわれた。あんなにホカホカとした良い気持ちになれるのは人間の一生で度々は無いだろう」と評しています。

このように、テロや紛争、戦争など破壊的な暴力のない世界、あるいは貧困や抑圧差別といった構造的な暴力のない積極的な平和主義の概念を、スポーツあるいは身体活動から発信していくことが重要だと思うのです。

スポーツの次なる一歩

1964年東京オリンピックで、首都東京が構築され、成長思想が全国各地に波及していきました。1950年代から、上下水道が整備され、首都高速ほか幹線道路が作られ、人口密集や公害問題も出てきました。東京西部の駒沢や新宿、世田谷は発展しましたが、東側は取り残されてしまったように思います。

100周年記念シンポジウムでは2020年オリンピックの東京招致が話題に上りました。ここで私たちは、環境問題や都市デザインの問題を踏まえ、様々なスポーツ施設を含んだ発展の様式が、本当にこの都市構築の延長上で可能かどうか、そして私たちがスポーツを中心としてどういうライフスタイルを構築していくのか改めて考える必要があると思います。

もう一つ、スポーツとメディアの関係も重要です。3.11東日本大震災から1週間後の3月18日、毎日新聞社、全国高野連主催の選抜高校野球大会が開催されました。「被災地に光を」「運営を簡素化し球場で募金」「ナイターを自粛」と、メディアでは様々に報じられました。実際に私たちは創志学園の選手宣誓に感動しましたし、閉会式での東海大相模高校主将の「被災した方々に野球をすることを許してもらった。自分たちは勇気をもらった」という言葉にも感動しました。その一方、東北高校野球部の生徒が大会終了後に地元でボランティアに励む姿が、一部のメディアで取り上げられました。甲子園というシンボリックなレベルで活躍する一方、生活の中で「公正さ」あるいは「環境」、「平和と友好」というものと現実的にどうかかわるかという問題があるわけです。その意味で、1974年以降のスポーツ少年団の日独同時交流事業やスポーツ・ツーリズムといった草の根レベルのスポーツの持つ力を、どのように打ち出していくかということも重要に思います。そして「スポーツ宣言日本」を踏まえ、メディアがスポーツをどのように伝えるか。私たちがスポーツというものをどう理解するかが問われているのです。

質疑応答

「自発的」の意味について

質問1　宣言文の書き出しには、「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である。」と定義されておりますが、「自発的」という言葉が意味するものは何ですか。

佐伯　この言葉をどうしても宣言文に入れたかったのには理由があります。スポーツは20世紀になってからすさまじい勢いで人気を持ち、非常に強い社会的な影響を持つようになりました。一人のアスリートが100億を超える年俸をもらえる時代にもなりました。しかし、本物の経済学者は、これはやはり正当な経済ではないと見ています。マネーディーラーと同じいわば現実離れした経済現象の一つであって、ヨーロッパにはサッカーザウルスが徘徊しているけれども、先はそう長くないという批判さえあります。そういうことを踏まえた時に、スポーツとは一体何か、スポーツの何を大事にしなければいけないのか、この巨大な力を持ったスポーツがどんなメッセージを22世紀に残せるのか、これはこの宣言を起案するときに一番大きなテーマになりました。

昔ある調査で北欧の国に行き、そこの国のスポーツ政策をヒアリングしました。私が一番感心したのは、「スポーツに内在する価値を何よりも大切にする、その上に立って政策を展開する」ということが明確になっていたことです。ちょっと難しい表現ですが、そのこと自体の中に意味や価値が含まれている、そういうものを内在的な価値があるといいます。それに対し、それを行うことによって報酬を得たい、何かを得たい、これを外在的な価値と言います。その報酬が何であれ、お金であれ、評判であれ、先生が褒めてくれることであれ、これはすべて外在的な価値です。スポーツが外在的な価値でいくら評価されてもスポーツの本当の評価にはなりません。そういうことを考えた時、これから21世紀を見通していく日本のスポーツの100年の指針の中に、このコンセプトを入れたかったのです。内在的価値という表現は使いませんでしたが、「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である」、このことが大事にされなければ、スポーツは本当の意味で、人間の教育にも健康の価値にも社会的な絆の強化にも本当はつながらないということ、そして外在的な価値は、実はスポーツが持っている運動の純粋な楽しみを求めることから発生してくるということを主張したかったわけです。

プロモーションという言葉が健康作りの分野では使われています。体育の世界では、振興から推進と変わりました。振興計画ではなくて推進計画ということになりましたが、これはちょっとした変化だと思います。健康行動というのは本当に個人の主観的な価値観に支えられています。この行動を本当に健康の実現に向けていこうとするとき、振興とか上から目線でこうやれということはほとんど通用しません。喫煙の数を減らすというムーブメントも同じことです。WHOを中心として厚生労働省系のところでは、内発的な行動変容、内側から行動を変えていこうということでプロモーションという言葉を使います。自発的な運動の喜びを基調とする人類共通の文化であるという言い方の中には、実はこのことも含まれています。健康に良いから、良い人間ができるからスポーツをしようというのも勿論一つの方法ですが、スポーツの本当の良さに気付いた時に自然に価値を求めて参加する、かかわっていく、そのことによって外在的な価値が実現されていくという表現の仕方が、一方ではあるわけです。スポーツが22世紀まで残り続けるとしたら、スポーツを行うこと自体、かかわること自体の喜びが、行った人たち、かかわった人たちに伝わっていく、このことを外してはスポーツが存在し続けることは絶対にないと思います。その意味で、「自発的な」という言葉は非常に大事な意味があるということをご理解いただけると思います。

質問2　スポーツサイエンスの発展と比べ、スポーツ・体育の本質について考える機会が減っていると感じます。これからも変わらないスポーツの本質とはなんでしょうか。

清水　小学校から大学まで体育の授業がある国は世界中を見渡しても少数です。大学の体育は週に1回しかありませんが、ただ講義を受けて帰るだけでなく、運動をさせることで見えてくるものがあります。自分のからだと心がどうなっているのか、あるいは人と相対した時、チームの中に入った時にどうなるか。この見えないものを見えるようにする時間が、非常に重要なのではないかと思います。

滝口　いま日本ではさまざまな競技でエリート教育が取り組まれており、骨密度や遺伝子検査なども行われ始めています。医・科学を否定するものではありませんが、行きすぎると旧東ドイツのような危ない世界に入り込む危険をはらんでいると感じています。

コーディネーターのまとめ

本宣言には、いくつかのポイントがあります。その一つは、「スポーツにはミッションがある」とはっきり謳ったことです。スポーツは単に自己実現のためだけの営みでは無いのです。3.11の東日本大震災の後、楽天イーグルスのエース・岩隈選手は「野球なんてやっていいんだろうか？とても不安だった」と言っています。アスリートに限らず、多くの人が自問したことでしょう。岩隈にしてみれば自分の野球の才能を開花させてメジャーリーグまで行きたい。それはそれで素晴らしい事です。しかし、その自己実現が社会的な貢献にならなければ、自信を持つことはできません。ミッションとはそういうものです。あなたの務めをしっかり果たす事が、社会に、人類に貢献する事につながっていく。それが21世紀のスポーツに求められるのです。

このことは二つ目のポイント、「スポーツ・イニシアティブ」と大きくかかわります。スポーツはメディアにとって非常に重要な、また便利な道具です。様々なメッセージをスポーツのシーンを使って伝達する事ができます。Jリーグの試合でも、ただ広告を並べるだけでなく、様々なメッセージを流す事が可能です。しかし宣言の本当の意味は、スポーツがメッセージを伝える手段になるのではなく、スポーツ自身が持っているメッセージを伝え、それを実現する事を通してこのミッションを達成しようという提案をしていることです。スポーツが持っている世界への影響力、人々への影響力、生活を変えるイノベーションの力をスポーツ人が自らの手でこれを発揮しなければなりません。それは不可能な事ではなく、スポーツが持っている本質的な価値を21世紀の時代に合うように実現していく事によって、それが可能だという意味を込めています。スポーツの世界は、自分たちの価値を自己満足に終わらせないで、社会や人類への貢献に寄与していく使命を帯びているのです。

2000年の時代を2100年の時代につないでいく。スポーツがそのようなメッセージの伝達者になっていければ、我々が嘉納先生による趣意書を振り返る時に抱く念を、私たちの将来の子孫たちにも持ってもらえるのではないかと思います。